

金沢城石垣編年表

時期	主な年代	藩主	主な穴生	自然石積・割石積・粗加工石積石垣			切石積石垣		
1期	文禄年間頃 (1592～1596)	①利家	穴太家②源介						
2期	慶長年間頃 (1596～1615)	②利長	戸波清兵衛						
3期	元和年間頃 (1615～1624)	③利常	後藤家	③源兵衛					
4期	寛永年間頃 (1624～1644)	④光高		①李兵衛					
5期	寛文～ 元禄年間頃 (1661～1704)	⑤綱紀		③権兵衛	④源二郎				
6期	宝暦～ 安永年間頃 (1751～1781)	⑩重教 ⑪治脩	正木基左衛門	⑤用助	⑦源左衛門				
7期	享和～ 文化年間頃 (1801～1818)	⑫斉広		⑥彦三郎 ⑧小十郎	⑨源兵衛				

石垣アラカルト



隅角部の稜線を縁取る「江戸切り」
[5期・薪ノ丸]



石垣に残る建物痕跡
[左：4期・東ノ丸附段門の屋根痕跡]、[右：5～7期・土塀の屋根痕跡・数寄屋屋敷北（裏口門西）]



切石積石垣の表面加工
[上：6期・本丸鉄門]
[下：7期・二ノ丸松坂門]



隙間は詰石の欠落
石口に合わせた加工詰石
[4期・本丸戊戌櫓下(西)]



切石積石垣の天端を留める
鉛のチギリ [6期・河北門]



火災で溶け落ちた鉛瓦の滴
[4期・二ノ丸極楽橋下空堀]



亀甲石 [7期・土橋門（東）]



二ノ丸御殿の雨水を落した石樋
[6期・数寄屋屋敷東]



軍隊が石垣で閉鎖した埋門跡
[左右の石垣は6期・本丸戊戌櫓台南方]

金沢城を探る

「石垣の博物館」その技と意匠



① 二ノ丸居間先の「色紙短冊積」石垣 [5期改修(寛文～元禄頃)]
V字形石樋(右上部)からの落水の背景に、縦長石を3段に配置。
石樋には黒色の「坪野石」を使う。庭園借景石垣の代表例。

玉泉院丸(現県体育館周辺)の庭園に面した石垣は、切石積みの技法を多用し、高さや配置、石の積み方から細部の加工に至るまで、趣向を凝らした石垣群が展開している。
江戸前期以降、金沢城の石垣は土木建造物の枠を超え、技法の使い分けによって、場にふさわしい景観を積極的に演出する役割も担った。



② 変化に富む玉泉院丸泉水縁の石垣群 [5期改修、6期改修(宝暦頃)]

金沢城の石垣は、技法や意匠の多様性に特色があり、「石垣の博物館」とも称される。「自然石積」、「割石積」、「粗加工石積」、「切石積」等の石積み様式は、場の性格や周囲との調和にも配慮しながら、城郭整備の歴史と共に多彩な発展を遂げた。その結果、技法的にも意匠的にも、他に類を見ない程、変化に富む石垣景観ができあがった。

1. 初期金沢城の石垣普請

金沢城の石垣普請は、文禄元年(1592)に始まる。石材は当初から戸室石(安山岩)を用い、不揃いな自然石や割石を巧みに積み上げて石垣を構築した。文禄・慶長(16世紀末～17世紀初め)の石垣は、勾配が緩く直線的なことを特徴とし、隅角部の構築法(「算木積み」)が急速に発達する。



③ 本丸丑寅櫓下 [1期(文禄)]



④ 本丸申酉櫓下 [2期(慶長古)]
[4期 左側継足し(寛永)]

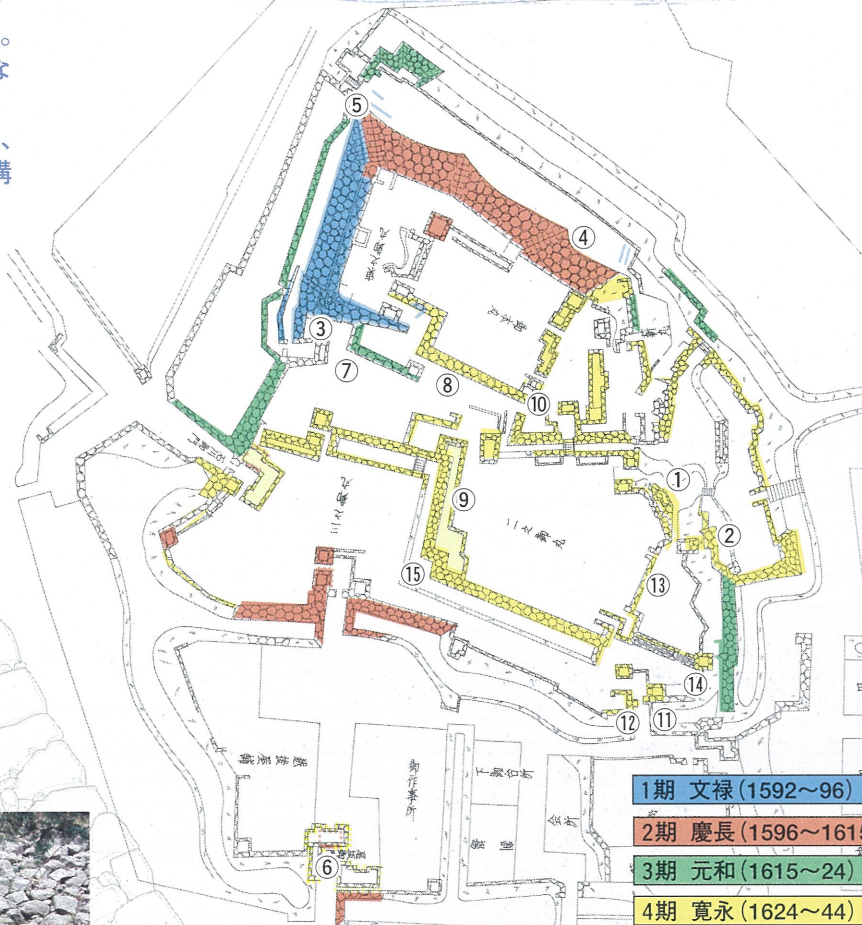
時期が下るにつれ、角石が長くなり、角石・角脇石の形状や寸法が規格化する

⑥ 新丸尾坂門 [2期(慶長古)]

尾坂門の石垣は、大形の平石(鏡石)を使い、大手口にあふさわしい堂々とした構えとなっている。



2. 段階的に進んだ石垣整備



- 1期 文禄(1592～96)
- 2期 慶長(1596～1615)
- 3期 元和(1615～24)
- 4期 寛永(1624～44)

初期金沢城の石垣整備は大きく3段階で進んだ。まず、本丸東、次いで、本丸南の高石垣や三ノ丸北及び尾坂門周辺、さらに附段や外堀の整備を経て、大手筋の要所と城の中枢が石垣で固められた。その後、寛永期の大規模な再整備を経て、城の形が確定する。



⑤ 本丸辰巳櫓下 [2期(慶長新)、明治40年上部撤去]



⑦ 東ノ丸附段 [3期創建(元和)、5期改修]

3. ニノ丸整備と切石積石垣の登場

寛永大火(寛永8年 1631)後、ニノ丸を中心に本丸や三ノ丸の一部を含めた広い範囲で、石垣普請を伴う大規模な再整備が行われた。この頃の石垣は、勾配が増して曲線的な反りがつく。石積み様式は、割石積の系譜につながる粗加工石積に加え、新たに規格的な石材を隙間なく密着させて積み上げた切石積が登場し、場の性格に応じて使い分けられた。



⑧ 本丸北 [4期創建(寛永)]



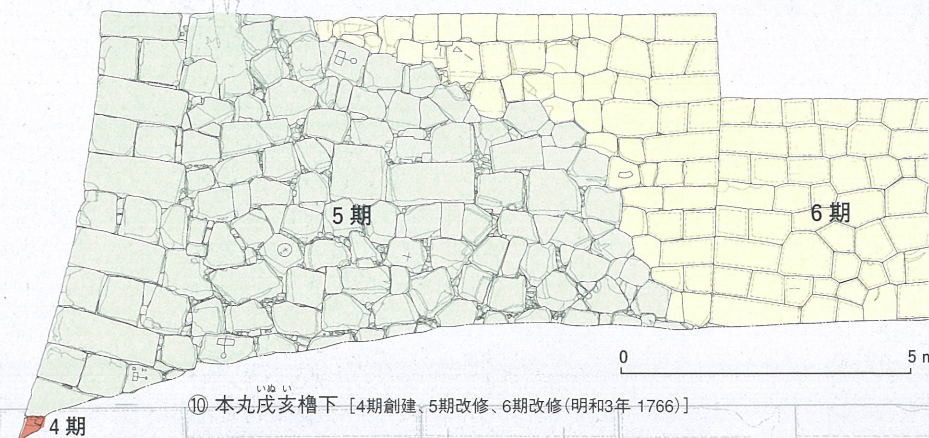
⑨ ニノ丸五十間長屋(西面) [4期創建(寛永8年 1631)]
切石積石垣は、当初、五十間長屋や数寄屋敷等、ニノ丸御殿周辺の石垣と、ニノ丸から本丸へ至る通路周辺の石垣に限って採用された。正面を正方形に整えた石材を多用し、緻密で整然とした壁面を構成する。



金沢城の石垣刻印は200種以上といわれる。4期(寛永)石垣には大型刻印が目立つ。

4. 繰り返された石垣修理

その後も、災害復旧や施設整備等を目的に、石垣修理が幕末まで続いた。中でも、寛文(17世紀後半)、宝暦(18世紀後半)、文化(18世紀末～19世紀初)の修築は規模が大きく、城内各所でその痕跡を見い出すことができる。石垣修理は旧状に復するのが原則であったが、修理に伴って新たな様式が創出され、金沢城の石垣を多様なものとした。



⑩ 本丸戌亥櫓下 [4期創建、5期改修、6期改修(明和3年 1766)]



⑪ 三ノ丸土橋門(西) [5期改修(寛文5年 1665)]



⑫ 三ノ丸土橋門(東) [7期改修(享和年間 1801-03)]



⑬ 数寄屋屋敷(東) [4期創建、5期・6期改修]



⑭ 数寄屋屋敷北西 [4期創建、5期改修]



⑮ ニノ丸菱櫓下 [4期創建、5期改修(寛文8年 1668)]



五十間長屋の石垣から出土した修築記念石(宝暦13年(1763)銘)